

HOF 01-045

本田財団レポートNo.45

「アラブの行動原理」

国立民族学博物館教授 片倉 もとこ

## 講師略歴

片倉もとこ（かたくら・もとこ）

昭和12年 奈良県に生まれる。

昭和49年 東京大学理学系大学院地理学博士課程を卒業。  
在学中、コロンビア大学中東研究所客員研究員、  
その後エジプト、サウディ・アラビア・シリアにて  
民族学的調査に従事、津田塾大学教授を経て、

昭和56年 国立民族学博物館教授、現在に至る。理学博士。

専攻 社会地理学、文化人類学、比較文化論

著書 「アラビア・ノート」(NHKブックス)

「Bedouin Village, A Study of Saudi Arabian  
People in Transition」(東大出版会)

「文化人類学 遊牧・農村・都市」(八千代出版)

はじめ多くの著訳書がある。

このレポートは昭和59年3月12日、パレスホテルに  
おいて行われた第34回本田財団懇談会の講演の要旨を  
まとめたものです。

## はじめに

この講演依頼を頂きました時に、新聞を賑わしているような時系列的な事ではなく、その底にあるもの、底に流れているもの話をしてほしいということでございました。これは、かなり難しい注文でございます。「はいきた」と出前のような具合にはいきませんが、なるべくご注文にそった話をさせて頂きたいと思っております。



## アラブとは誰のことか（アラブの定義）

日本人というのはどういう人達の事をいうのか、と真正面から聞かれるとそれを定義するのが非常に難かしいように、アラビア人を定義するのも大変難しいのです。日本人よりもっと難かしいかも知れません。アラビア人を正確に定義する事はできないのですが、しいて定義しますと、「アラビア語を愛し、イスラーム文化を生活の基盤としている人達」ということになりましょう。

### ●アラビア語

アラビア語は現在22ヶ国で公用語として使われています。アラビア語が今のようなアラビア語になったのはそれほど歴史が古いわけではありません。北アラビアの方で話されていたアラビア語が、はっきりとアラビア人の言葉となりましたのは7世紀にコーランが出た時です。コーランがアラビア語で書かれ、それが今のアラビア語になっているわけです。7世紀に確立した言葉が今も全く変わらないで、その時の状態のまま使われているというのは世界でも稀でアラビア語位かもしれません。もちろん、これはフスハといわれる文語のことで、これは全く変化しておりません。アンミーアといわれる口語、すなわち話し言葉の方はずい分変わっておりますし、地域によっても異っております。

エジプトはアラブ世界の中では一番先にマス・メディアが発達しましたので、エジプトの口語が他のアラビア語圏でもラジオ・TVを通して入って来ています。しかし、神の言葉だとされる正統アラビア語からすれば、とんでもない田舎言葉がエジプトの話し言葉という事になります。エジプトに限らず、地域的にアラビア半島から遠くなるにつれて変化の度合が大きくなっていると言えるようです。サウディ・アラビア、オマーンなどアラビア半島で話されているアラビア語は、正統アラビア語フスハにかなり近い美しい言葉です。

1974年には、国連の公用語にもなりました。それまでの英仏中露西の5つの公用語に加えて、アラビア語が入ったわけです。国連の大会議場にアラビア語のための新しい同時通訳のブースができ、日本の代表は日本語で演説する事は許されていないのですが、アラビア人の代表はアラビア語で滔々と演説を思いのままにするのを、そのころニューヨークに居りまして、私はよく見聞きしたものです。アラビア語は響きの大

変きれいな言葉で、それがこれだけイスラームが普及した一つの理由になっていると  
言われています。

## ●イスラーム

アラビア人を取り上げた時のもう一つの大きな共通項は、イスラームという事です。  
イスラームはもちろんアラビア人だけのものではありません。数の上ではむしろ東南  
アジアの方の宗教と言った方が良いでしょう。バングラデッシュ・インドネシア・  
おしゃか様の国インドもイスラーム教徒が非常に多く、人口からしますと東南アジア  
の方がはるかに多いわけです。イスラームはアラビアで興った宗教ですが、今やアジ  
ア・アフリカのみならず、ヨーロッパ・ソ連・中国にまで広範囲に広がっています。  
日本のように徹底した人口センサスがとられている国は世界でもそうはありませんし、  
特に宗教人口となりますと難しいのですが、人口の半分以上がイスラーム教徒である  
国は45ヶ国ほどになります。世界には現在、約 170ほどの国ができておりますが、大  
ざっぱに言えばそのうち50ヶ国に近い国が直接イスラームに関係あると言えると思  
います。

地球上のイスラーム教徒の人口を全部合計しますと、大体6億から7億であると言  
われており、現在その数がどんどんエクスパンドしています。例えばイギリス・アメ  
リカなどでも、キリスト教徒がイスラーム教徒に改宗するという現象が見られます。ロ  
ンドンの真中に立派なモスクができ、大勢の人が集まっています。研究のために何度  
か訪れてみましたが、まるでイスラーム革命後のテヘランの雰囲気を感じさせるく  
らいでした。カナダでもバンクーバーなどは、イスマイリ派の人達がずい分活動して  
います。アフリカのイスラーム化は最も早いと、報道関係の方やアフリカを研究して  
いる民族学者の方が、そういう報告をしております。

先程申しましたアラビア語を公用語として使う国は22ヶ国ですが、もちろんイラン  
のようにアラビア語を話さないイスラーム国もあります。トルコもそうですし、アフガ  
ニスタンなどが皆これに入って来るわけです。これらの国は、中東という範ちゅうで  
呼ばれていますが、今日は中東の中で多くを占めるアラブに焦点をしばって考えてま  
いります。

## 行動原理を条件づける三要素

アラブを含めた中東では近年、毎日の新聞をにぎわす事態を起こしております。こ  
のそうぞうしい状態がアラブにとってはむしろ正常な状態であって、静かであった植  
民地時代などは異常なときであった、と私は考えております。彼らにとっては、不安  
定こそ安定という面があります。

しかし一般に、アラブは何をやっているのかわからない、というのが外から見た印  
象のようです。混乱に混乱を極めて何も筋を通していないではないか、行動原理など  
というものがはたしてあるのか、というような感じが外からはするわけです。特に日

本人の私達から見ると、そういう感が強いのです。日本人がアラブを不可解だ、あるいは不快だと思うのは当然の事であると言いますのは、行動の原理になっているもの、ものの考え方の基礎になっているものが、私達の持っているものと全く違うからです。

民族学という学問は世界中の色々な人達の文化を詮索するわけですが、文化というのは大体その人達の価値観、ものの考え方によって形成されて行くものです。一時は進化論的な文化論もはやりましたけれど、本来文化には上等とか下等とかいう事はなく、考え方の違いがあるだけだというのが近年の民族学の考え方です。

その考え方の違いというものはどうして出てくるのかは、たいへん難しい問題で、それについて誰も真正面から解いてはいませんが、私はアラブの場合をモデルに一つの仮説を持っております。それは、それぞれの民族集団を三つの条件要素から考えてみるということです。

まず、一つの民族が歴史的にどうやって食べて来たか、という生産様式の問題です。牧畜をやって来たか、農耕をしてきたか、たとえばお米を栽培して食べて来たか、というようなその民族がとってきた生産様式の問題です。これは現在どういう生産様式で食べているか、という事ももちろん入りますが、歴史的にずっと昔からどういう風にして食いつないで来たか、というながいスパンで考えます。

それから二番目には生活の様式です。生産様式と生活様式というのは区別されないで用いられる場合もあるようですが、私は区別いたします。「生産様式」という場合、人間がどうやって食物を獲得して来るか、そしてどうやって経済を成り立たせているか、という事に限定します。「生活様式」という場合には、獲得した食物をどうやって消費するかといいますか、どのような気持で食べるか、ということにしたいのです。生活様式の中には、はしで食べるか、フォークで食べるか、手づかみで食べるか、というようなことも入りますが、そういう細かい事は今日はさて置きます。生活様式のキーになる要素を取り上げてみますと、その民族の持っている一つの宗教的な意識があげられます。ごはんを食べる時に誰に感謝をして食べるか、日本の場合にはお百姓さんだったり、作ってくれたお母さんだったり、稼いでくれたお父さんだったり、あれやこれやの多数の対象に感謝しながら「いただきます」と申します。それも山本七平さん風に言えば、日本教あるいは日本人のものの考え方と言って良いかも知れません。

三番目には集団様式という要素です。人間というものは大体一人では生きて行けないわけですし、必ず何らかの集団を作ります。私どもの民族学でも、文化を問題にする時には必ず集団を問題にいたします。「はずかしながら帰って参りました」とおっしゃった横井さんのように一人で頑張ってやってらした方も、ジャングルの中で木の葉で洋服を作ったとか、一つの文化をお作りになったともいえますが、ああいうのは例外として民族学では研究対象にはいたしません。

人間がどういう風な集団を作るか、という事を見てもみますと、民族ごとにずい分異った性格の集団を作っていることがわかります。ある民族の生産様式、生活様式、集団様式のそれぞれについて検討してみますと、その民族の行動原理といったものが出てくると考えるのです。アラブの場合について見てみますと、アラブは近年、急速な変化をとげていますが、アラブの歴史を見てみますと、遊牧や牧畜という生産様式に

たよって来た期間が長いことは、皆様ご存知の通りです。現在でも遊牧民はおりますし、数は少なくなって来てはいますが、これが絶滅するという事はないだろうと思います。そういう風な遊牧的な生産様式というものが、この人達のものの考え方を条件づけているわけです。その具体例はのちほど述べさせていただきます。

アラブの場合、生活様式と申しますと、ご承知のイスラームが大きく出てまいります。もちろんクリスチャン・アラブと呼ばれるキリスト教徒のアラブもおりますが、イスラーム教徒が多数を占め、イスラーム的環境を作っていると言えます。

イスラームという宗教がキリスト教やユダヤ教などの宗教と一番違っている点は、生活に密着しているという事です。アラビア人の生活様式を語る時にはどうしてもイスラームを理解しなければなりません。

三番目の集団様式についてアラビア人を見てみますと、彼らの集団は部族型といえるものだと考えられます。日本では東京も村であると言われるように、部落型の集団様式を作るといえますが、その部落に対してアラブ社会では部族という風に言ってもよいのではないかと思います。部族というものがどういうものかは後程お話しさせて頂こうと思います。

以上みて来ました三点、即ち遊牧・イスラーム、部族のどれをとりましても私ども日本人にはなじみのないものばかりでございませぬ。日本には遊牧とか牧畜の伝統が全くございませぬ。牧畜の伝統のないところは、世界ではむしろ例外的でございませぬ。ヨーロッパ・アメリカなどは半分以上牧畜の伝統を持っております。イギリスの中東への食い込みようと申しますか、理解度の深さは日本人とは比べものになりませぬ。イラン革命の時に、BBCの放送が一番正確だったといわれますのもさもありなんでございませぬ。ヨーロッパと中東は距離的にも非常に近いし、牧畜の伝統という事からヨーロッパ人はアラビア人を理解しやすい立場にあるといえましょ。う。

二番目のイスラームも、日本にはほとんど存在しないものです。日本人の子孫が影響を受ける程のイスラームとの出会いは、日本の歴史の中に全くなかったわけです。イスラームと日本との出会いがなかったという事実さえ、はっきり意識されておりませぬ。「日本の思想」の中で、「世界中の思想は日本の思想の中に吸収されている」と述べた丸山真男氏でさえ、イスラームの思想が日本に入っていなかったということをつかり忘れていらっしやいます。

日本人は部族と聞くと首刈り族などを思い出して、大変野蛮な印象があるようです。部族というのはどのような集団なのか、我々日本人には見当がつかないのです。

## アラブの民族学的考察

このようにアラブの生産様式・生活様式・集団様式のどれをとり上げてみましても、どうも私たちにはわかり難いものばかりなのです。アラブの行動原理、ものの考え方がよくわからないものも道理かと思えるわけです。

この三つの一つ一つについてお話しさせて頂こうと思うのですが、とても一時間では十分に話せませぬので、そのさわりの所だけをかいつまんでお話しさせて頂きます。

## ●遊牧型生産様式

### — 現在志向 —

遊牧という生産様式は、どういうものの考え方と関連しているかと申しますと、まず現在志向であるということがあげられます。もちろん彼らとて、過去のことも考えます。とくに文学・詩の世界などでは、過去をなつかしむ、かつて恋人が住んでいた住居跡をしのぶなどというノスタルジックなものが沢山ありますが、現実的な生活の上では、過去は経験として生かしはするが、あまり重要視しません。圧倒的に現在を重視いたします。過去とか未来というものは二の次、三の次になってしまいます。未来を語る事は神に対する冒瀆だと言う考えすらあります。未来というものは神に属するものだ、という風にアラビア人は考えています。

たまにしか降らない雨とそこに生える草を求めて移動していたのがもともとの遊牧です。このごろはトラックで移動し、道路工事にも従事するといった新しい形の遊牧も出てまいりましたが、遊牧の原型は雨雲を追い、草と水のありかを探るものでした。「雲が出て雨にならなければ何の意味もない」と言うアラブの諺がありますが、現時点において、雨が降ったか降らないかに重大な関心が集中いたします。現在において実際になされたことが、常に問題となります。今どういう状況であるのかを見きわめようといいたします。

皆様ご記憶だと思いますが、1973年のオイルショックの時に、フランスとかイギリスは友好国に選ばれました。これに対して過去の歴史をご存知の方は皆首をおかしげになったと思います。過去においてイスラエルを作り、イスラエルをそこに持って来たのはフランス・イギリスなのに、そういう国を友好国にしたのですから……。

しかし過去においてそうであったにしろ、今どういうポリシーをとっているか、どういう状況で自分達に接しているかというように、彼らは現時点を重んじ、現在の状況を考えて行動する、というところがあります。過去の因縁とか恩義だとか、過去の義理人情という風な事で行動をしないのです。過去からずっと一貫して態度が変わらないというのが日本で言う「筋を通す」という事です。日本的な意味の「筋を通す」という事からすれば、アラビア人は行き当たりばったりという事になりますが、彼らの「筋を通す」という事は今現在どうであるかという事を見定めて、その時その時を処していく、それが筋を通すことだと言うのです。

これに関しては、最初に申しましたアラビア語も関係してきます。ご承知の通り、言語と文化の間、言語と物の考え方の間には密接な関連性があるわけですが、アラビア語は時制そのものにはほとんど重点を置かない言語です。普通の言語ですと、過去形、現在形、未来形などがありますが、そういう風な言語体系にはなっていません。一つの行動が過去においてあった事であるか、あるいは現在の事か未来の事かという風に、どの時制に属するかという事ではなくて、ある行為が既に完結してしまったか、あるいは未だか、という風な二つの大きなカテゴリーに分けるだけで、現在の状況という事に重点を置くわけです。これに関しては、言語学者の東京外語大学の牧野信也先生が講談社の学術文庫から、「アラブの思考様式」という本を出版されていますので、ご興味のおありになる方はお読み下さるとさらにお分り頂けるのではないかと思います。

## ●イスラーム型生活様式

次にイスラーム型生活様式というのはどういうものであるか、という事でございます。イスラームは日本人の私共にはなじみがなかったのですが、世界の三大宗教といわれるだけあって、キリスト教・仏教にまさるともおとらない「でっかい」宗教でございます。私もこれからもっと勉強しなければならないと思ひまして、今年から三年計画で「イスラームの民族学的研究」という共同研究を、専門の研究者に定期的に民博（民族学博物館）へご参集いただいて始めております。その成果はいずれまた御報告できると存じますが、今日はこれまでの私が勉強して参りましたところから申し上げさせていただきます。

### —— 契約の概念 ——

ご承知の通りイスラームはセム系の宗教でございます。セム系の宗教はみな大体そうですが、神と人との間の契約が宗教であるという風に考えます。神と人との契約が破られる時（大体契約を破るのは人間の方ですが）神のいかりにふれるという風に考えます。イスラームはユダヤ教・キリスト教の流れを引いた宗教で、そういう神と人との間の契約の観念が同じようにあるわけですが、それに加えてイスラームの場合には神と同じ契約をしている人間同志は平等でかつ契約的でなければならないといたします。

モハメッド自身も商人でしたから商売とイスラームはおおいに関係があるのですが、そこで強調されるのは、神と同じ契約を結んだ人間同志は皆同格で、人と人との間の契約もきびしく守らなければいけないという事です。「身分から契約へ」という事が近代ヨーロッパで言われるようになったずっと以前から、このような契約の思想というのが発達していたわけです。

例えば、結婚も人間と人間の間の契約だとされ、当事者の男女の間で厳格に契約書を取り交わすわけです。私もその場に何回か立ち合いましたけれど、契約書に色々な条件を書き入れます。条件を書き入れる所がいちばん大きなスペースがとられていて、色々念をおしてそこに条件を書き入れるのですが、その中で一番重要視されるのは、男の方から女の方に払う、マハルと呼ばれる結納金です。これは前払いと後払いに分かれています。前払いというのは結婚する時に払う分で、後払いは離婚のときに払うものでございます。

江守五夫先生などもおっしゃっていますが、世界的にみて結納金を男が女に払うのはかつて女性の地位が高かったことを物語る場合が多いといひます。アラビアでも、マホメットの妻ハディースは15才年上の女大商人で、彼女はマホメットの雇主であったわけです。あの頃の歴史には、このハディースのように強い堂々とした女性が沢山でおります。後払いは現代的に申しますと保険金のようなものと言えましょう。離婚をする時の慰謝料を先に決めておくとも言え、女性にとっては、一種の社会保障になります。結婚すると女が損をするしくみになっているので、せめて離婚をする時



はちゃんとしておこうという契約です。

ここには、中東との商売をなさった方もあるいはいらっしゃるのではないかと思います。中東へ行きますと結婚に限らず契約というものが非常に厳格に守られます。日本社会にももちろん契約はありますが、そのなされ方は中東の場合と随分ちがいます。出版社との契約ぐらしか私はしたことがありませんが、実にいいかげんなもので、原稿を書き終えるのが2～3年遅くなっても、どういうこともありません。契約書を取り交わすときも、何か色々細かく書いてありますけれど、「ここら辺でいいですか」などと言って判を押してしまうという風です。商売の方ではもう少しきびしいのでしょうけれど、どちらかと言えば、余り契約などをやるのは太っ腹でない人間である、という風な考え方が日本にはあります。しかしアラビア人の場合には、いったん契約を結びますと非常に厳しい。もし契約を破った場合には、どういう風な償いをするという事が初めからきちんと決まっているし、決まった事はちゃんと成されなければならないというわけです。

中東とかアラビアをご存知の方はアラビア語の「インシャーラ」という言葉をお聞きになった事があると思います。神の思召しがあれば、という意味の言葉です。何か約束した時に神の思召しがあればという風な返事をして、はっきりと「はい、そうします」とは言わないのです。「あしたどこそこで会いましょう」と言うと、「インシャーラ」と言う。こちらは約束してくれたのかどうかわからず不安な気がする。初めのうちは私もインシャーラと言わないで、「はい、そうしましょう」と言ってほしいと思いました。神の思召しがあれば、という事は思召しがあれば約束を反故にされるという事ですから、大変頼りない。こういう「インシャーラ」的約束を今申しましたような厳しい契約とは矛盾しているのではないかと、お思いになる方が多いのです。

しかし実は矛盾していないと私は考えるのです。どうして矛盾していないかと申しますと、アラビア人の人間観が私たちのものと少しちがうということです。日本人は、「人間は、みな根はいいのだ。そんなに悪い人間はいないものだ」という風に考えます。性善説で社会が成り立っています。「いつもあんな事を言っているけれど根はいいやつなんだよ」という風に大体が許されるような人間関係です。

アラビア人は私の言葉で言いますと、性弱説ではなかろうかと思うのです。人間というのは非常に弱い存在であるという考え方です。アラビア人は、「あした会いましょう」と約束していてもその日のうちに交通事故にあうかもしれない。おなかを悪くして死んでしまうかもしれない。それに弱い人間ですから、いったんは会うと言ったけれど、今日になったら会いたくなくなってしまったということもある。要するに人間は弱い存在である」という事を潔く認めるところがあります。それ故どうしてもこれは何とか人間の力でちゃんとやらなくてはいけないということになりますと、それを契約に持っていくわけです。書きものにして、違反の時の罰則まできめて、弱い人間をがんじがらめに縛ってしまおうとする。そうすると、少々誘惑があっても、少々何かがあっても何とか物事がうまく行くだらう、とそういう考え方で契約というものを成立させます。こういうわけで契約思想とインシャーラ思想とは、結びつき、あいおぎないあってイスラーム社会に機能しているのだと私は考えるのです。

## — イスラームの自然観 —

イスラームというのは非常にエコロジカルと言いますか、生態学的なところのある宗教です。神の存在を自然のエコロジーの中に見るということです。

コーランの中にも出て来るのですが、神を信じない人に対して、「お前達、本当に神を信じないのなら、それでは東から出て来る太陽を西から出してみろ。それができたら神を信じなくても良い。」という風な事を言います。それから日常の会話の中でも、「あの山は誰が作ったか。」というような事を私などに聞いてきて、そこで神様という存在を認識するわけです。そういう点ではむしろ日本人の自然観に近いようなところがあり、自然を征服するというような西欧的な自然観は、イスラーム教徒達にはなじみません。こういう事からもイスラーム社会の反西欧という事が出て来ますし、イラン革命が起った一つの要因でもあるのではないかと思われれます。

### ●部族型集団様式

三番目は部族型の集団様式についてでございます。地球上で人間が作っております色々な集団を形成している個人と集団の関係から見ると、三つに分類できるのではないかと思います。

一つは、「集団の目的や大義を重要視して、集団の成員である個人個人はその集団の目的の為に犠牲になる」という風な集団があります。これは日本などで多くかなり見られます。集団の目的の為に個人が犠牲になり、それがむしろ美德になるといった性格をもちます。

そういう集団とはちがい、「集団というものはその成員個人の幸せの為に作るものであって、個人個人が幸せでないならば、その集団に入っている意味がないのだ」という風な考え方をする人達の集団もあります。そういう集団を作る社会では、自分の利益がない場合には、さっさとその集団から抜けてしまうことが当然のことと考えられます。アメリカなどにはそういう集団が多いようで、ソニーの社長さんがある日突然東芝の社長さんになるなどというような事が平気で行なわれるわけですが、日本ではどうしてそんな事は考えられません。

## — 両極型の集団様式 —

それではアラビア人の作る集団はどういうものかと申しますと、これが非常に複雑でありまして、先に述べました日本型集団、アメリカ型集団の両方の特徴を備えています。これを私は両極型の集団様式と呼んでいます。この集団の中では個人個人もそれぞれ己れを主張しますと同時に、集団の大義とか目的への志向も一方では重要視するのです。集団としてのまとまりを作ろうとする求心力のようなものと、個人個人がバラバラになるような遠心力とが常に同時に働いているような集団が形成されます。たいへん複雑な性質をもった集団ということになりますが、これが部族的集団様式あるいは両極型集団と私が呼ぶものなのです。

どういう時に求心力が働いて、どういう時に遠心力が働くかを分析してみますと、経済的な要因が重要になって来る場合、つまり具体的な生活の次元では遠心力が働く傾向にあり成員がバラバラになりやすくなります。

一方、社会的な要因あるいは集団の大義名分が問題になるような場合、つまり抽象的な次元では求心力が働きます。イスラエル打倒というようなスローガンは、求心力を働かせるときにアラブ民族を団結させる力になりました。抽象的、理念的なことが重大になる時には、求心力が働くわけです。

しかしエジプトがイスラエルと単独講和を結びました時には、エジプトという成員に遠心力が働きました。エジプトはあの時スエズ運河閉鎖が長びき、イスラエルとの戦争により、(戦士となるのはいつもエジプト国民でしたので) 経済的に非常に疲弊しました。これ以上はもう経済的にやって行けない、アラブの集団の大義のために、アラブ民族の集団の中にとると、自己の経済や生活基盤が危ういというような事になりますと、遠心力が働いて集団から出て行くという現象がおこります。しかしエジプトはこのたび、イスラーム諸国会議のメンバーとして、アラブ集団に復帰しました。イスラームという大義に、経済的な要因が全く絡んでいないとは言いきれませんが、イスラームという大義名分によって求心力が働き、集団に戻って行くという現象が見られるのです。

アラビア人と一緒に生活してみますと、社会的な関係と経済的な関係が重なり合わない事がわかります。はっきりと分離しています。日本の場合ですと、社会的な関係と経済的な関係というものが重なり合う場合が多いようです。例えば、会社では月給をもらうだけではなくて懇親もするし、課内旅行などというものまであって、奥さんや家族を放っておいて会社の女の子達とどこかへ遊びに行くという事もあるわけです。アメリカやアラビアなどの外国人は、理解し難い日本的集団だと評します。

経済的集団と社会的集団、あるいはゲゼルシャフトとゲマインシャフトが同一であることが多いといえましょう。そういうことが一切ないのがアラブの集団です。そこらへんも日本人にとってアラブは異質に感じられるわけでしょう。

## —— アラブの権力構造 ——

そういう風な集団の中では、権力構造も我々のものとは違っていています。日本の場合ですと、「黙ってついて来い」と言って前に向かって皆を引っばって行くという風なやり方ですが、彼らの場合には神の前には全部一緒だというので、皆が自己主張をします。その中でたまたま現時点において実力のある者が指導者になるわけですが、その権力者が必ずしも長続きするわけではありません。被支配者から常に実力が試されているのです。ですからいったん権力を握ると その権力を危うくしそうな人物はみな殺しにしてしまう、というような残酷な事が歴史上起こっているのがアラブです。しかしそういう風な事をして権力を保持しようとしても、人々が「あいつはだめだ」という判断をすると即座に引きずり下してしまいます。サウジアラビアの国王もご承知の通り何人かの引きずり下しがありました。

指導者は人民の前に立って引っぱるといよりは、羊を飼うのと同じで、後からあおりたてていくような感じです。日本では動物を動かす時、首に縄をつけて自分が先方に立ち引っぱって行きますが、アラブでは後ろから追いつけて行きます。羊と人間は同じではありませんが、人間の場合でも「黙っておれについて来い」というやり方はアラブでは通用しません。横にそれますが、中国でも追いつけて型で壁新聞は、人民を追いつけていく一つの方法だとも言われます。

アラブに進出した日本の企業の方が「アラブは文句ばかり言っておる。全然言う事をきかない。」とお困りになっている事がありますが、それは指導の仕方が日本とアラブでは非常に違うということに原因があるかと思われまます。

以上、急いでかいつまんでお話申しましたように、部族型の集団様式の中では、我々と色々な事がずい分違ってきます。部族にしろ、イスラームにしろ、遊牧にしろ、私ども日本人にはなかなか理解し難いところがあるのですが、おこがましく分ったような事を申しました。

はしよりましたので要領を得なかった所もあるかも知れませんが、今日のところはこういうことをご容赦下さい。

## 本田財団レポート

No.1 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭53.5	No.24 中国の現状と将来 東京外国語大学教授 中嶋嶺雄	昭56.9
No.2 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって 東京大学教授 公文俊平	昭53.6	No.25 アメリカ人から見た日本及び日本式ビジネス オハイオ州立大学教授 ブラッドレイ・リチャードソン	昭56.10
No.3 生産の時代から交流の時代へ 東京大学教授 木村尚三郎	昭53.8	No.26 人々のニーズに効果的に応える技術 GE研究開発センターコンサルタント ハロルド チェスナット	昭57.1
No.4 語り言葉としての日本語 劇団四季主宰 浅利慶太	昭53.10	No.27 ライフサイエンス ㈱三菱化成生命科学研究所人間自然研究部長 中村桂子	昭57.3
No.5 コミュニケーション技術の未来 電気通信科学財団理事長 白根禮吉	昭54.3	No.28 「錬金術 昔と今」 理化学研究所地球化学研究室 島 誠	昭57.4
No.6 「ディスカバリーズ国際シンポジウム バリ1978」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.4	No.29 「産業用ロボットに対する意見」 東京工業大学教授 森 政弘	昭57.7
No.7 科学は進歩するのか変化するのか 東京大学助教授 村上陽一郎	昭54.4	No.30 「腕に技能をもった人材育成」 労働省職業訓練局海外技術協力室長 木全ミツ	昭57.7
No.8 ヨーロッパから見た日本 NHK解説委員室室長 山室英男	昭54.5	No.31 「日本の研究開発」 総合研究開発機構(NIRA)理事長 下河辺 淳	昭57.10
No.9 最近の国際政治における問題について 京都大学教授 高坂正堯	昭54.6	No.32 「自由経済下での技術者の役割」 ケンブリッジ大学名誉教授 ジョン F. コールズ	昭57.12
No.10 分散型システムについて 東京大学教授 石井威望	昭54.9	No.33 「日本人と西洋人」 東京大学文学部教授 高階秀爾	昭58.1
No.11 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ストックホルム1979」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.11	No.34 「ディスカバリーズ国際シンポジウム コロンバスオハイオ1982」報告 電気通信大学教授 合田周平	昭58.2
No.12 公共政策形成の問題点 埼玉大学教授 吉村 融	昭55.1	No.35 「エネルギーと環境」 横浜国立大学環境科学センター教授 田川博章	昭58.4
No.13 医学と工学の対話 東京大学教授 源美和彦	昭55.1	No.36 「第3世代の建築」 ㈱菊竹清訓建築設計事務所主宰 菊竹清訓	昭58.7
No.14 心の問題と工学 東京工業大学教授 寺野寿郎	昭55.2	No.37 「日本における技術教育の実態と計画」 東京工業大学名誉教授 斎藤進六	昭58.8
No.15 最近の国際情勢から NHK解説委員室室長 山室英男	昭55.4	No.38 「大規模時代の終りー産業社会の地殻変動」 専修大学経済学部教授 中村秀一郎	昭58.8
No.16 コミュニケーション技術とその技術の進歩 MIT教授 イシエル テソラ プール	昭55.5	No.39 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ロンドン1983」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭58.9
No.17 寿命 東京大学教授 古川俊之	昭55.5	No.40 日本人と木の文化 千葉大学名誉教授・千葉工業大学教授 小原二郎	昭58.10
No.18 日本に対する肯定と否定 東京大学教授 辻村 明	昭55.7	No.41 「人間と自然との新しい対話」 ブラッセル自由大学教授 イリヤ・プリゴジン	昭59.2
No.19 自動車事故回避のノウハウ 成蹊大学教授 江守一郎	昭55.10	No.42 「変化する日本社会」 大阪大学教授 山崎正和	昭59.3
No.20 '80年代ー国際経済の課題 日本短波放送専務取締役 小島章伸	昭55.11	No.43 ベルギー「フランドル行政政府産業使節団」講演会	昭59.7
No.21 技術と文化 I V A 事務総長 グナー・ハンベリユース	昭55.12	No.44 「新しい情報秩序を求めて」 電気通信大学助教授 小菅敏夫	昭59.7
No.22 明治におけるエコ・テクノロジー 山本書店主 山本七平	昭56.5	No.45 「アラブの行動原理」 国立民族学博物館教授 片倉もとこ	昭59.10
No.23 西ドイツから見た日本 電気通信大学教授 西尾幹二	昭56.6		